実際に行ってわかった教科書に載っていないアメリカの社会
－日米中学生意識調査を通して－

鳴門市北灘中学校　教諭　　小　濱　直　弘

(1)　はじめに

私はアメリカ合衆国に行くのは2回目である。前回は、文部省からニューヨーク日本人学校に派遣された徳島市出身の先生を訪ねての旅であった。その時見たアメリカ合衆国にある日本人学校はやはり日本の学校とは違った。しかし、あくまでもアメリカ人スタッフもいたり、現地校との交流はあるとはいえ、日本の教科書を使って授業をおこなっている、日本人のための学校である。さすがに低学年は、日本語よりも英語の方が上手な生徒もたくさんいたが、日本語で授業をすることによって徐々に日本語の方が上手になるという。また、中学生はなんとニューヨークには日本の大手進学塾が進出していて、その塾に通っているという。やはり日本人のための学校なのである。

ただ、アメリカ的なところもあった。それは、スクールバスのみによる生徒の登下校しか許されていなかった。なぜならば、地域住民の方との学校設置にあたっての条件が保護者のマイカーによる送迎を禁止するということだったそうだ。地域性の問題と思うが、高級住宅地で有名な高級テニスクラブも近くにあったからなのだろう。ニューヨークの中心からは離れたところにあったが、その環境は何ひとつ不満のないものであった。

その時に日本人学校を視察後、昼食をその先生の家庭に招待された。その先生には、当時小学6年生と3年生になるお子様がいた。日本人学校ではなく近くの現地校に通学していたそうだ。当然、3年前は英語も知らないままニューヨークに来たこの二人の子供が兄弟げんかを英語でやっていると聞き、たった3年間で英語をマスターさせるアメリカの学校の教育についてとても興味を持っていた。

今回、同じアメリカ合衆国のノースカロライナ州の学校を訪問できることになり、その時に抱いた疑問や興味を解決したいと思ってこの研修に望んだ。

(2)　研究の概要

【研究課題1】　ＥＳＬクラスによって英語ができない生徒達に英語ができる生徒に育てる授業について

①　フラットロックミドルスクールの現状

私が研修をおこなったノースカロライナ州のマウンテン地区にあるヘンダーソンビルのフラットロックミドルスクールのすぐ南はサウスカロライナ州である。また、学校近辺は丘陵地にある。また、近くには、山が連なっている。このような環境にあるため、生徒の95%は白人で、黒人の生徒は数えるほどしかいない。また、アジア系の生徒は1人しか会わなかった。このような中で、ヒスパニックの生徒は全生徒数830人中60人を超えているという。そのうち、英語が全くできない生徒も少なからずいるとのことである。アメリカの学校らしく、来るものは拒まずということで受け入れはどんどんおこなっている。そのため、ここフラットロックミドルスクールでは英語ができない生徒＝保護者がメキシコからフラットロックの特産物である「りんご農家」に働きに来たヒスパニックということになっているそうだ。そのためESLクラスはスペイン語ができる先生が英語を教えている。

②　社会科のテストに必ず出題されるヒスパニック

ここフラットロックに来るまでは、ヒスパニックの人たちはカリフォルニア州やメキシコ湾岸の州に多いと思っていた。そして、WCU（ウエスタンカロライナ大学）の大学地区の訪問した学校にはほとんどいなかったように思う。しかし、りんごが特産物でりんご農家に働きに来ているヒスパニック（ただ通訳の人はヒスパニックといわずスパニッシュと言っていた）の方が多いフラットロックは特に多いそうだ。この研修が終わって、9月に新学期が始まり、夏休みのサマーワークの課題テストや3年生の実力テストにこのヒスパニックが出題されていた。さらに、低くてなだらかなアメリカの山脈は何かというのも出題されていた。これの答えは、実際に見てきたアパラチア山脈である。

このように教科書ではアメリカ合衆国の11.5%の人はヒスパニックでスペイン語を話す中南米から来た

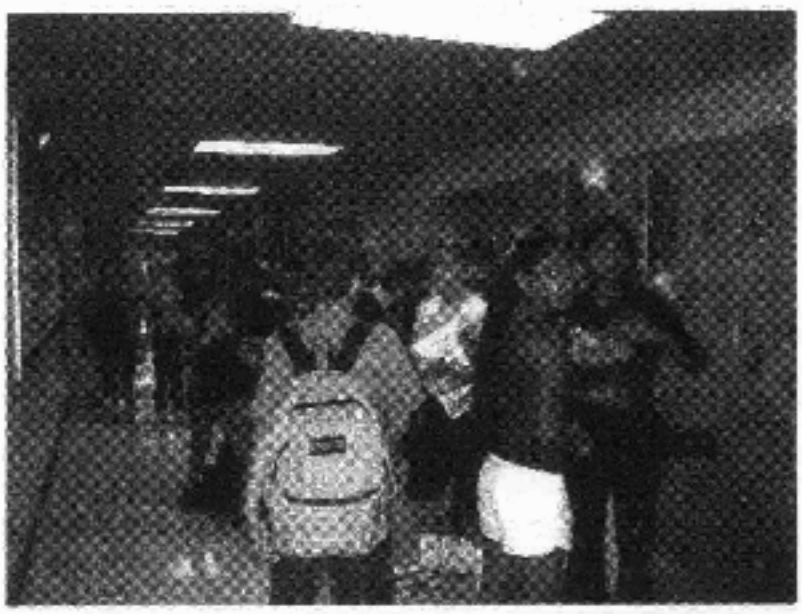
人々をさし、白人も黒人も含まれると必ず教えている。そして、テストにも出題しているが、ヒスパニックの本質は全くわかっていなかったことがよくわかった出来事があった。

③　英語がわからなくても授業にでないといけない苦しみ

フラットロックでの研修の初日に、7年生のARTの授業に参加した。「魚拓（GYOTAKU）」をおこなう前に、私が用意した中学生が夏休みに地元の漁師さんの協力をえて学校の目の前の海で実施した「底引き網体験」のビデオを見てもらい魚についてのことを初対面の7年生に紹介する授業をおこなった。そのビデオを見ているときは、英語や日本語等の言葉は関係なく魚がとれる様子のみを見ていたらわかるので、授業に参加している生徒はすべて異国の生徒がおこなっているこの海のないマウンテン地区の生徒にとっては経験できないことを真剣に見てくれていたように感じた。

しかし、そのビデオを見た後に、鳴門教育大学の小野先生に通訳をしてもらって、いろいろな質問をしてもらった時に、ほとんどすべての生徒は今回の研修でわかったことだが、先生に対して手を挙げて質問をしたり、積極的に授業に参加している。でも、その中に一人だけ手を挙げない生徒がいた。彼以外はこのクラスは白人の生徒であった。彼だけが日本人と同じような褐色の肌をしていた。なぜ彼だけが質問しないのかが不思議に思った。

理由は、このARTの授業の後、私もノースカロライナの学校に来ての初日だったので、以前から興味を持っていた、英語のできない生徒のクラスであるESLを見学させてほしいとお願いしていたら、見学どころか、体験入学をさせてくれた。その時にわかった。先ほどのARTのクラスにいた彼もこの授業に参加していたのだ。彼にとっては、英語も日本語もわからないのだ。わからなくても、メキシコからやってきて間もない彼はフラットロックミドルスクールに入学した以上は英語を理解できなくても授業に参加しないといけないのだ。そして、授業に関してはスペイン語しかわからない彼に対しての援助やヘルプは一切ないのだ。



唯一、このESLクラスに通級して、英語を理解できるように手助けしてくれるこの時間こそが彼に対しての「多民族国家」・「人種のモザイク」・「人種のサラダボール」といわれるアメリカ合衆国の方針である、来るのはかまわないが、英語ができるようにならなければ生きていけない。「だから早く英語をマスターしなさい。」これは、厳しい考えだけど、多民族国家ゆえに譲れない方針なのだろう。

ところで、ESLクラスに体験入学してみて、思ったことは、ARTの時間は一言も発言することのなかった彼が、陽気に早口に聞こえるスペイン語で機関銃のように、しゃべるしゃべるのである。授業中の彼の様子とは全く違うのである。同じメキシコから来た気の合う仲間と普段の言語である、スペイン語で自分の意志を仲間に伝えている。本当に楽しい表情に変わるのである。しかし、このクラスでの授業が終わり、再び普通の授業に戻ると無口にならざるをえないことがこのクラスを見学してよくわかった。

しかし、これは日本の中学生が、授業妨害をしたり、授業を抜けだして学校からいなくなり学校近辺の住民の方から苦情の電話をいただくことが時たまある。その原因の大部分は低学力であることがよくある。授業内容がわからないのである。でも、英語の時間以外は同じ日本語で授業はおこなっている。言葉は、何を言っているかはかるはずなのだが、このような現状は徳島県でも、今まで問題のなかった学校でも最近は少なからずおきている。

でも、ノースカロライナのフラットロックでは、このような問題は一切ないのだ。特に英語のわからない彼らには、日本の中学生以上に深刻な問題だと思うのだが、授業妨害も授業を抜けだすことも、学校に来ない不登校になることも一切ないのだ。

この理由を推測するならば、メキシコ（フラットロックはメキシコから来る人が大部分である）等のスペイン語の国を自らの選択で離れて、新天地を英語の国アメリカに選択したという後戻りのできない大きな差が

あるのだ。そして、アメリカで生きていくためには、進学にしても就職にしても英語をマスターしなければならないという重荷を背負っているのも事実である。

だから、彼らが参加しているESLのクラスは彼らにとってはこのアメリカ合衆国で生活するために、この国が与えてくれた唯一の進路保証の場なのである。私が体験入学をしたこのクラスの授業内容を紹介したい。

④　ESLクラスの授業の紹介

スペイン語が飛び交う教室。とても明るい陽気な教室。他のフラットロックの教室とは明らかに雰囲気が違う。これがESLクラスの印象だった。スペイン語は英語よりも早口に聞こえる。同じアルファベットなのに、発音も違う。それ故に、メキシコからフラットロックにやってきて、日が浅い彼らには、英語を中学校・高校・大学と学習してきた日本人の私よりも、似ているようで似ていない未知の言葉であるそうだ。しかし、2年たてば英語を何不自由なく話せるようになるそうである。英語を話せなければ、地域での日常生活も困るし、このフラットロックでの授業も理解することができないのだ。そのために、彼らは一生懸命に英語を学んでいる。先生が1人で生徒は6名の少人数でおこなっていた。日常会話のプリントが配られて、このプリントに基づいて、大きな声で読む練習をしている。発音がスペイン語と違うみたいで、なかなか発音できない単語もあるようである。次に、私も一緒に参加したCONBERSATIONの授業プリントを紹介する。

CONVERSATIONS	
Hi!	Hey there!
What' going on? (What is)	What's up? (What is)
How are you doing? (Howya doin' ?)	Great! / Noy good! / Ok
What's your name? (What is)	My name is (　　)
Where do you live?	I live in (Hendersonville)
What are you doing tonight?	I will (dance all night)
What's your phone number? (What is)	My phone number is (555-3434)
How old are you?	I am (thirteen) years old.
Where are you from?	I am from (Alabama)
Do you like it here?	yes / no
Wo W! your hair looks great!	Thanks! / yes, I know! / Really?
Cool shirt, man?	Thanks! / yes, I know! / Really?
Ok, see you later! (See ya later!)	All right, man!
See you later, alligator! (See ya later)	After while, crocodile!
Bye!	Bye!
Have fun!	You too!
Be good!	I am always good!
Peace!	Love!

⑤　私が授業を受けた感想

日本の中学校で学習する単語が並んだCONVERSATIONSのプリントであったが、スクールバスで学校に登校してきて、15時すぎにスクールバで帰校するまでにフラットロックの仲間たちと学校生活が円滑に営まれるように必要な会話から学習するそうである。日本で英語を学習するが、日本では英語ができなくても日本にいる限り生活に支障はない。しかし、ノースカロライナにやってきた彼らは英語しかない社会で生きていかなければならない。そのために、必要な会話を集めたプリントで学習している。挨拶の仕方や、生活のための会話等を授業で覚えさせている。なかなか集中できなかったり、すぐに飽きてしまったり、定着させるのは大変みたいである。しかし、同じメキシコからきた仲間が集中できない生徒に対して注意している。

この仲間意識がみんなで協力しあって英語を覚えられる要因になるのであろう。

⑥　日本の授業への導入

社会科の地理でアメリカ合衆国を学習する。その中で「多民族国家」の中で今回実際に体験してきたこの実際に体験した経験を授業に生かしていきたいと思う。また、人権学習でも、このヒスパニックの人たちの生活は資料として導入できるはずである。資料化をはかりたいと思う。このヒスパニック問題は実際にノースカロライナのフラットロックに行かないとわからなかった、本当に生きた教材であった。

【研究課題２】　日米が異なる日米中学生意識調査について

①　「学校は楽しいか」という質問をおこなう

この質問は日本の中学生に聞くと本当に意見が分かれる。楽しいという生徒がいる反面、楽しくないという生徒もいる。楽しくないという生徒の大部分は、人間関係に苦労するから楽しくないと答える生徒があまりにも多い。そのためか、最近、中学生の不登校があまりにも多くなってきている。１学期の末に、本校の２年生の生徒19名にこの質問をしていたので、同じ年齢のフラットロックの８年生に同じ質問をさせてもらった。答えは、日本よりも個人主義的で自由な国アメリカでは、日本以上に学校に対して、不信感をもっている生徒が多いと思っていたが、答えは予想と大きく違った。

②　日本の中学生は

日本の四国の徳島県の北灘中学校の２年生は19名しかいない。町内の２小学校から入学してくるが、共に小規模校のために保育所・幼稚園・小学校と家族的な雰囲気で学んできている。そのため、仲もよくて、競争意識は薄いのだが、学力に関しては自然と序列化ができあがってしまっている。そのため、人間関係がうまくいくと楽しいのだが、一度くずれるとなかなか修復が難しい。さらに、成長するにつれて上下関係が逆転すると仲間はずれもおこしてしまう。人数が少ないゆえの大きな悩みなのである。そのため、ゆれ動く２年生の思春期の今は人間関係で悩んでいる生徒が少なからずいるという答えがでて、夏休みを迎えた時であった。

また、前任校は徳島県一生徒数が多い徳島市内の中学校に勤務していた。本校のように少人数での悩みはなかったが、やはり同じように人間関係で悩む生徒は数多くいたし、不登校の生徒も何人かはいた。今の日本の中学生は、人間関係で本当に悩み、それが原因で学校が楽しくないと思っている生徒は数多くいるのが現状なのだ。

③　フラットロックの８年生は

それに対して、ノースカロライナ州のフラットロックミドルスクールの８年生に対してこの質問をしてみた。その答えは、いろいろあった。その解答例をあげてみると

◎社会科の時間が楽しい（なぜならば、みんなが行動的なので）

◎ランチタイムの時間が楽しい（みんなと話ができるから）

◎体育の時間が楽しい（みんなで体を動かすことができるから）

◎先生との交流（先生がすごくやさしくて、気を遣ってくれるから）

◎アフタースクールのチアリーダーの活動が楽しい（選抜されたから）

◎国によっては貧しくて学校に行けないのに自分たちは学校で勉強できる（勉強できることが幸せである）

上記のような答えが返ってきた。特に、大部分の生徒が友達との人間関係が楽しいと答えてくれた。これは、日本の中学生とは大きく異なる答えであった。学

校に来るということが当たり前であるということは日本もアメリカも同じであるのだが、学校にいつでも来てもよいという日本に比べて、学校に来てよい時間が決められているフラットロックミドルスクールの違いから来るのが原因なのだろうか。この原因を、フラットロックミドルスクールの先生や今回通訳をお願いした、現地校にお子様を通学させている梅野さんにお話を聞いた中からまとめてみたい。

④　フラットロックの８年生に悩みはないか

友達との人間関係があるから学校生活は楽しい。と答えてくれたが、それでは、フラットロックの生徒には悩みはないのかと言えば、あるらしい。しかし、その答えは日本とは大きく違っていた。③の原因をまとめる前に少し触れてみたいと思う。この悩みを聞いて、宗教や文化の違いが想像以上にあることを知ることができた。「異文化」と簡単に言うけれど、これも実際に現地を訪れないとわからない大きな問題であった。次に生徒からの聞き取り調査の結果を報告する。

◎テロリストアタック（９月11日のテロが再び起きないかが心配）

◎フラットロックミドルスクールに９月11日以降に７回も爆弾を仕掛けたという、いたずら電話があったこと（運動場に避難したがこんないたずら電話をしないでほしい）

◎父親が警察官なのでとても心配である（テロ事件があってから危険な仕事なので心配である）

◎家族のことが心配である（離婚問題が絡んでいるらしい）

●８年生が２回目なので進級できるかが心配である（落第したため）

自分自身の悩みは上記の●印の成績のことのみであった。といってもこの内容を平気で、会って２回目の日本からやってきた私に教えてくれるということは日本では考えられないことである。言い換えれば、周りの仲間達が彼に対して特別視もせずに接しているからこの発言が生まれるのだと思う。この人間関係の絆に驚きを感じた。しかし、曖昧な発言が多い日本人にとって、YESかNOのアメリカ社会であるから遠慮は決してしてはいけないと、鳴門教育大学での事前指導で教えられていたが、８年生の生徒にいたっても、このアメリカ的な考えは行き渡っているのだと思った。これも、日本人的な考えがよいのか、それともアメリカ的な考えがよいのか、考えれば考えるほど難しい問題である。

大部分を占めた◎印の項目の中で一番驚いたことは「アメリカ合衆国の一員である」という愛国心が日本で思っていた以上に強かったということである。しかも、日本の25倍もあるとてつもなく広い国土面積であるアメリカ合衆国である。大都市ならばわかるような気がするが普通の小さな町のヘンダーソンビルの町の人々でも、この愛国心というものは普遍なのである。今日の日本では愛国心を否定する教師の団体や同じ様にそれを指示する政党や市民団体まで存在する。過去の歴史の過ちがそうさせたのであろうが、私は、社会科教師である。今の中学生に「日本は悪い国です」というような指導は今までもしてこなかったつもりであるが、このアメリカ合衆国の愛国心が心底まで浸透している教育をまざまざと見せつけられて、今の日本に絶対に必要な教育方針だと実感し、社会科教育の中で是非とも今まで以上に取り入れて実践していきたいと決意した。

二番目に驚いたのは、家族のことを思う気持ちである。不登校の生徒の中には、友人との人間関係で不登校になる生徒もいるが、保護者とのトラブルで不登校になる生徒もいるのが現状だ。しかし、フラットロックでは家族のことで悩んでいる生徒は多いのだが、日本のように学校に家庭でのしつけまで期待されているようなことはないらしい。家庭でやるべきことは、家庭で当然のようにおこなう仕組みになっているらしい。しかし、日本以上に保護者の方の離婚問題は深刻らしい。けれども、家庭のトラブルが原因で、昼夜が逆転して、学校に来れなくなったり、深夜徘徊をして警察に補導されたりするようなことは、フラットロックではないということである。この問題だけは、ヘンダーソンビルカウンティーが治安がよく、昔のよきアメリカ合衆国そのもののであり、またそのような行為を決して認めないノースカロライナ州の教育方針が備わっているからなのかもしれないが、日本の今の教育方針は何か違う方にいっているなと感じた。

⑤　素晴らしきノースカロライナの教育

今回の研修で通訳をしてくださった「梅野」さんは、ヘンダーソンビルにある日米合弁企業の日本側責任者としてご主人が20年前にこちらに来られて以来、ヘンダーソンビルの隣の市であるアッシュビルにずっと在

住している方である。お子様も３人いるらしいが、アメリカ合衆国には日本人学校がシカゴと前述したニューヨークにしかないために、アッシュビルの現地校に通学させているとのことである。ただ、日本語補習校はアメリカ各地にあるらしい。フラットロックの南の町はノースカロライナ州でなくてサウスカロライナ州である、このサウスカロライナにある日本語補習校に毎週土曜日に１時間30分かけて連れて行っているとのことである。サウスカロライナには日本の富士フイルムの工場があり、日本から50家族が来ているとのことである。そのために、日本語補習校が設立されたということである。

このために、今回の研修で、フラットロックミドルスクールの先生のお話（お世話になったプール先生のお子様もフラットロックの８年生の生徒であったために教師としての立場と保護者としての両方の意見を聞くことができた）と梅野さんの話（日本の学校とノースカロライナの学校との違いを聞くことができた）をきくことによって、ノースカロライナの教育は、一言で言えば、日本が過去にやってきた教育を今おこなっていて、日本はその素晴らしい教育を捨て去ってしまったと感じたのである。

⑥　インタビューからわかったこと

アメリカの教育システムは州によって少しずつ違うのだが、ノースカロライナ州ではミドルスクールは６・７・８年生の３年間学習することになっている。日本でいうならば小学６年生・中学１・２年生が同じ学校で学ぶことになっているのだ。この日本よりも１年の前倒しはどうなのだろうか。この点に関してインタビューをすると、アメリカにはなんと「ビージサーティーン」なる法律があるのだそうだ。この法律は13歳になるまでは、買い物に行くのも映画に行くのもどこかに出かける時は必ず、保護者同伴でないといけないのだそうだ。学年でいえばミドルスクールの６・７年生が該当するそうだ。自分たちだけ外出してよいのは、８年生だけであるのだ。その法律の有効性からも日本よりも１年前倒しは妥当性があるといえると思った。

しかし、このインタビューで思いがけない自分の勘違いがあることに気づいた。それは、日本の様に自分の住む地域の学校へ原則としては通学している。それは、日本ならば私立の学校や大学の付属学校へ試験を受けて進学することが認められている。ノースカロライナではこの種の学校はチャータースクールにあてはまるのだろうが、まずほとんど自分の住む地域の学校に進んでいる。でも、根本的に違うのはノースカロライナのヘンダーソンビルのミドルスクールの校区はあまりにも広いということである。それは、フラットロックの校区はりんごの産地である。学校の近くにはりんごの農園はなかった。ということは、家が密集しているところしか見ていなかったのだ。密集しているといっても隣の家とは100ｍぐらい離れていた。日本の中学校の校区とはその広さが全く違うのである。そのために、日本のように学校から家に帰ってから、友人の家に歩いたり、自転車で遊びに行くということは、安全性の問題もあり現実的には不可能なのである。保護者の方の車の送迎がなければ不可能なため、友人と会えるのは学校でないと会えないのだ。

だから、同じ年齢の仲間が全員集まることができるのが、学校なのである。学校から帰れば、電話やメールでのやりとりはできても、実際に会えないのである。会えなければ、楽しくない。学校にみんなが集まることができるから、一番楽しい場所なのである。フラットロックの８年生が、「学校は楽しい 。その中でも人間関係が楽しい。」という意見がでたのが、この話を聞いて納得した。

このような意見がでたが、授業中はきちんと授業を受けている。友人同士が決して話をしていない。休み時間も５分の移動時間だけである。ランチタイムも30分しかない。日本の学校に比べると余裕のない学校生活を送っている。でも、放課後は決して会えない友人と会える喜びが学校が楽しいといい、不登校の生徒は全くいないフラットロックミドルスクール。地域性もあるだろうが、このフラットロックのように、すべての生徒が学校が楽しいといえるような学校作り、また、日本の学校が抱えている不登校生徒の急激な増大の問題を解決するにあたり、日本の学校が生徒を長時間学校で拘束しすぎていることを感じ、そのために、家庭で家族とふれあう時間が少なくなってきていることを感じた。このことを改善すれば、ノースカロライナの教育に学ぶことができるのではなかろうかと思った。

(3)　おわりに

今回、ノースカロライナ州のマウンテン地区のヘン

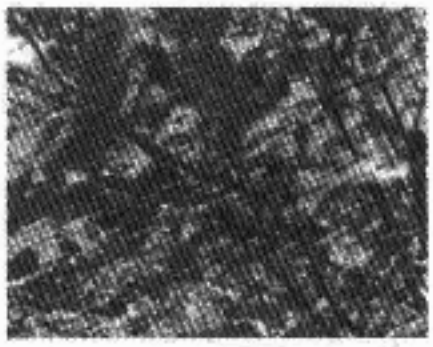
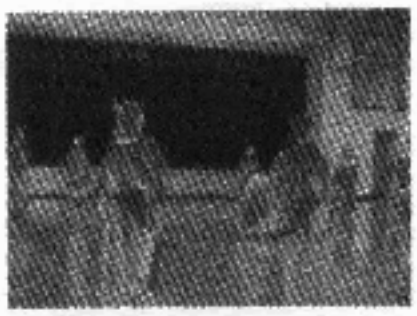
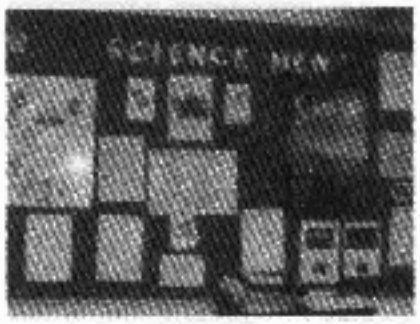
ダーソンカウンティーのフラットロックミドルスクールでの研修をおこなうことができて、以前にニューヨーク日本人学校を視察したときに疑問に思った、いくつかの疑問点を解決することができた。この研修を生かして、これからの社会科教育の授業の資料作りを進めていきたい。

さらに、WCUの大学の先生から提案されている、生徒の相互交流ができれば、多感な中学時代に、このようなフラットロックをはじめ、マウンテン地区の学校に体験入学できれば、絶対に素晴らしい体験になると思う。是非とも実現するためには協力を惜しまないつもりである。

最後に、英語がほとんどできないまま参加したが、いろんな人の支えによってどうにか交流することができたが、やはり、英語で会話ができたらもっとよかったということを学校に帰って生徒達に報告した。

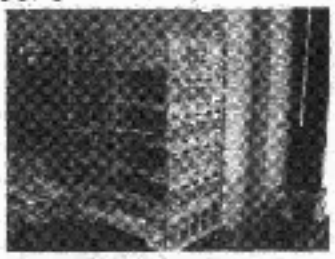
グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト
米国現地研修ジャーナル（2002年８月18日－８月28日）

鳴門市立鳴門工業高等学校　教諭　　川　村　美千代

日　時	場　　所	主　　な　　内　　容
8/18（日）		
0：00	WCU内 Madison Hall到着	大学のゲストハウスらしいが、ホテルばりに綺麗。とにかく明日にそなえて就寝。
8：30	ブラウンカフェテリアで朝食	大学内のカフェ。$3.94で食べ放題。あれこれ入れてもらいすぎて、食べきれなかった。甘いものが多い。
10：30	Graveyard Fieldへ ハイキング	片道１時間程度の道のり。山あいの景色が美しい。天気がよく汗ばむほどの陽気だったが、着くと標高が高くて涼しい。ブルーベリーを摘む人がたくさんいた。私も木から摘み試食。甘酸っぱい。大きい実ほど甘いということを発見。 
18：00	Dr. Penny Smith家で ポットラックパーティ	とても素敵な家だった。家の中を自由にうろうろし冷蔵庫も勝手に開けてＯＫ。そういうのがアメリカンスタイルらしい。
8/19（月）		
8：00	Cullowhee Valley Elementary School	図書館でPTAの人が用意してくれた朝食をいただく。 
8：45	体育館で歓迎会	多くの生徒が歓迎のダンスなどを披露してくれる。
	授業参観	
9：30	C. West先生のクラス ７年生　理科	先生１人、生徒32人。 ４人程度のグループになって着席している。後ろの方の席の生徒２人が少し不真面目そうな感じで先生が板書をはじめたとき、ノートを持っていなかったようで、教卓の所にある紙をもらっていた。しかし授業の邪魔になるようなことはない。教室は先生ひとり一人のものなので、掲示物等に各先生の個性を感じる。 
	教室の扉には先生の名前	
	McCord先生のクラス １年生 （キンダーガーデンクラス）	先生２人、生徒14人。 数人ずつ別々のことをしている。足し算のプリント、塗り絵のようなもの、単語を書く練習など。
	Cox先生のクラス ５年生　国語	先生２人、生徒22人。 ４人程度のグループで着席。書き取りプリントをしている。途中、席を離れ前に集まりミーティングがはじまる。

鉛筆削り

椅子（教科書が大きい）


宿題ボックス

突然始まったミーティング

11：45	カフェテリアで昼食	ランチタイムは学年クラスごとにバラバラのようで先生に従い、廊下を並んで食堂に入る。ほとんどの生徒は食堂の同じメニューを食べているが、わずかの生徒は持参のランチをとるらしい。コンピュータの所でメニューをチェックしてもらい料金は後払いというシステム。
12：45	Smoky Mountain High School	図書館で学校の概要について説明を受ける。全校生徒約970人、職員約100人（うち教員約70人）、12年生135人、11年生224人、10年生280人、9年生206人ということなので、中途退学者も多いということだろう。
	スクールツアー	職業に直結したさまざまな実習系の授業を見学。

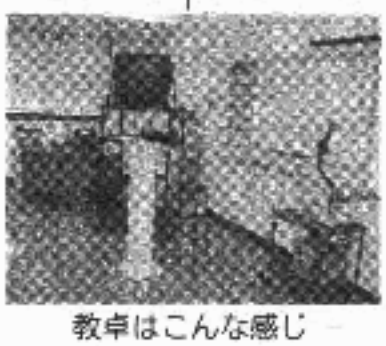
授業で作製された
電気自動車

学校内の壁
生徒の卒業制作の絵

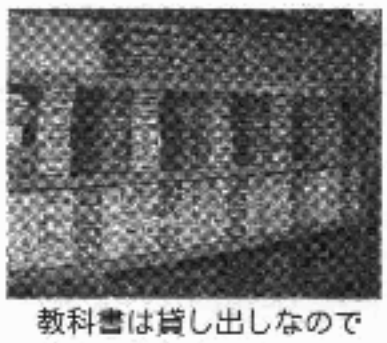
授業で作製された家

この家は実際に販売され収入は次年度の実習予算の一部になる。

16：00	NCCAT	全米ナンバー1の教師が設立した州の教員研修センター。スタッフ14～16人。教員は申込みをして5日間のプログラムで研修を受ける。多くの研修テーマが設定されている。
18：30	NCCATで歓迎レセプション	明日から訪問する学校のパートナーの先生や通訳の人と顔合わせなど。
8/20（火）		
8：00 （1限）	Tuscola High School 学校案内	校長先生と3人の副校長先生に会う。4人でそれぞれ分担して生徒指導に当たっている。カウンセリングルームのスタッフの方からも少し話を聞く。


教卓はこんな感じ

教科書はこんなに
大きくとても重い


教科書は貸し出しなので
教室に教科書の棚がある

学校の駐車場
登下校時は相当な
ラッシュになる

8：30 （2限） （3限） （4限） （5限）	授業実践 日本の学校生活の紹介 （本日のみ時間割が変則で1コマ35～40分）	15分程度のビデオ（私のクラスの1日の学校生活を撮ったもの）を見せた後、質疑応答。各クラスの人数は、それぞれ20人前後で、グレードもさまざまであったが、クラスによって多少雰囲気が違うように感じた。例えば、質問にしても、どんどん手が挙がるクラスもあれば、そうでないクラスもあった。日本の、生徒が教室にいて先生が授業にくるというようなシステム、清掃活動、制服、校則などに興味があるようだった。多少の差はあるものの、どのクラスもおおむね真面目で落ち着いた印象を受けた。

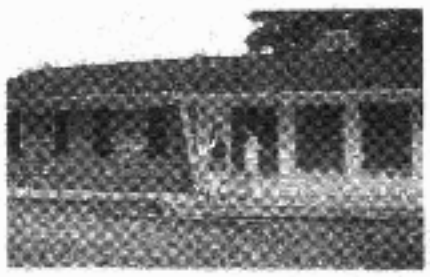
12：00	食堂でランチ	生徒の昼食時間は２つに分けられている。食堂には必ず校長先生がいて、生徒の様子を観察している。障害児学級の生徒を健常の生徒が世話していた。
14：00	Waynesville市内	通訳の方の案内で１時間ほど市内観光。
18：00	WCU内の食堂	夕食
19：30	Madison Hall	リフレクション
8/21（水）		
8：00 （１限）	Tuscola High School 授業実践 （本日より平常授業50分） 漢字・書道に親しむ	12学年。美術のクラス。生徒14人。 いろいろな言葉を漢字で示したが自分の名前を漢字で表すことに人気が集まったので、明日の授業までに全員の名前を漢字に直してくることを約束。
9：00	スクールツアー	Smoky Mountain高と同じく実用的な授業がたくさんある。

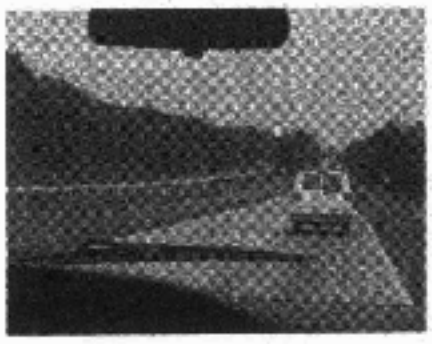
医療事務
実際に病院実習へ行くために予防接種を受けている。

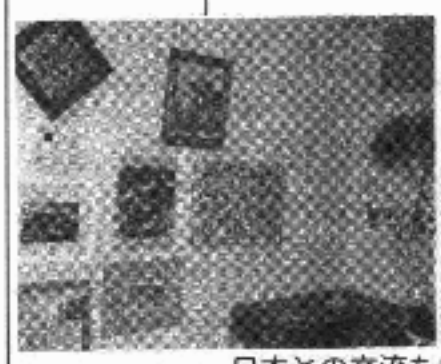
煉瓦の組み立て

障害児学級
健常児が障害児を教えている。

12：00	食堂でランチ	
13：10 （６限）	授業実践 漢字・書道に親しむ	12学年。美術のクラス。生徒11人。 １限と同じ内容。
14：05 （７限）	授業実践 日本の学校生活の紹介	11学年。英語のクラス。生徒23人。 昨日と同じ内容。
18：00	Sylvaの町で夕食	“フライドグリーントマト”というこの地方の料理が美味しかった。 “Dead Guy”という面白いネーミングのビールも飲んだ。
21：00	Madison Hall	夕食が長引き、遅めのリフレクション。
8/22（木）		
8：00 （１限）	Tuscola High School 授業実践 漢字・書道に親しむ	12学年。美術のクラス。生徒14人。 昨日の続きの授業。 日本から持参したうちわに生徒ひとり一人が漢字にした自分の名前を清書。
8：55 （２限）	ホストファミリーを紹介してもらう	週末にホームステイさせていただく、レベッカ先生、スーザン先生と顔合わせ。
9：55 （３限） （４限）	カウンセリングルームで生徒へのインタビュー	カウンセリングルームの活用法や学校生活について質問。 12学年女子、11学年女子の２名の生徒対象。 ２限に引き続き、生徒へのインタビュー 12学年男子、12学年女子の２名の生徒対象。

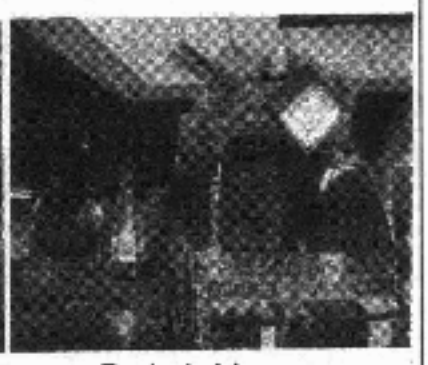
11：40	教務室などで 評価の仕方などについて質問	小テストや宿題など５～６個の評価項目を各教師が独自に設定し、それぞれの割合をパーセンテージで示したものが、教師個人のコンピュータに入力されている。客観的に見て明確な評価である。成績表も見せてもらった。出欠について質問したところ、６時間以上欠席すると、生徒は放課後や土曜日などに超過分の補講を受けなければならないという。そして、その場合、生徒は補講料金を支払わねばならない。アメリカらしいはっきりしたシステムだと思った。
12：30	食堂でランチ	
13：10 （６限）	授業実践 漢字・書道に親しむ	12学年。美術のクラス。生徒11人。 １限と同様、昨日の続きの授業。
14：05 （７限）	カウンセリングルームで 生徒へのインタビュー	引き続き、生徒へのインタビュー。 12学年男子２名、女子２名の計４名。最後に、11学年女子（日本人とアメリカ人のハーフ）で、昨年度（高１）まで日本の高校に通っていた生徒に日米の学校生活の違いなどについて感想を聞くことができた。 カウンセリングルーム
18：00	Sylva の町で夕食兼リフレクション	メキシコ料理を食べた。野菜が多くて満足。
8/23（金）		
8：00 （１限）	Tuscola High School 授業実践 日本の学校生活の紹介	昨日までと同様。
8：55 （２限）	教師の休憩室	昨日、話を聞かせてもらったハーフの生徒の両親が来校しており、保護者の方とも話をすることができた。
9：50 （３・４限）	英文学の授業を見学	ディスカッションの授業が見たいと希望したのだが、教師の発問に対して生徒が答える形式で日本の国語の作品読解の授業とほとんど変わりはなかった。日本と比べると板書が少ない。授業の最後に次回の小テストについて説明していた。どの授業でも小テストは頻繁に行われている様子。
11：40 （５限）	授業実践 日本の学校生活の紹介	昨日までと同様。 私のスケジュールの都合で30分程度の授業となる。
12：10	食堂でランチ	
13：10 （６限）	校長室で 校長先生に話を聞く	鳴門教育大の喜多先生と一緒に学校全体の組織などについて話を聞く。スタッフブックなどをいただいた。
16：00	ホームステイのため レベッカ先生宅へ	レベッカ先生は友人との２人暮らしだったが、１件屋をシェアしているのには驚いた。夜、私の希望でBlue grassフェスティバルに連れて行ってもらった。 
8/24（土）		
10：00	ホームステイのため スーザン先生宅へ	素敵な住まいと温かい家族に感動。Biltmore Eastateなどを観光した。日本から持参した素麺をふるまったら、ご主人はバターと塩こしょうを加えて食べていた。ありゃりゃ…。

8/25 (日) 9：00	一路、州都 Raleighへ 	ひたすら車で移動。夕方頃ようやく到着。これまで滞在していたのどかなWCU地区と比べると、少し情緒に乏しい感じがした。 夕食後、明日のサマリーミーティングの準備。鳴門地区は2グループに分かれていたので、久しぶりに顔を合わせ、互いの研修について報告。結局、サマリーの準備に明け方までの時間を費やす。 滞在はBrownestone Hotel。
8/26 (月) 9：00	Exploris Museum 内の会議室で サマリーミーティング	各地区ごとに研修結果を発表後、質疑応答。昼食をはさみ、講演や姉妹校調印式などがあり15：00頃終了。WCU地区でお世話になったアメリカの先生方とお別れするのが辛かった。 WCU地区のメンバー
7：00	Japanese restaurantで夕食	串カツを注文したら、豚カツの串刺しみたいなものが出てきた。
8/27 (火) 9：00	Exploris Middle School・ Exploris Museumを訪問	博物館に併設された私立のチャータースクールである。 小規模であるが独自のプログラムで教育を行っている。
13：00	North Carolina Museum・ 州教育委員会を訪問	教育委員会では副教材などが備えられているフロアでスタッフからの説明を受けた。コンピュータも備えられており、教師はここでさまざまなリサーチができる。
8/28 (水) 6：00	日本へ	お疲れさまでした。



日本との交流も盛んなようす

生徒が作ったカードが販売されていました。


Exploris Museum

アメリカが育成する子ども像
－カウンセリングルームの活用法を中心にした生徒の意識調査を通して－

鳴門市立鳴門工業高等学校　教諭　　川　村　美千代

(1)　はじめに

本プロジェクトは今年度が3年計画の3年目、つまり、最終年度に当たる。日米の教育システムや、学校の組織運営の違いなどについては、昨年度までにおおよその報告がなされている。そこで、今回の研修では、できる限り生徒の目線に立ち、特に、日本と異なる部分の学習環境を生徒自身がどのようにとらえているのかなどに注目しながら、アメリカの教育システムの中で育成される子ども像を、日本のそれと比較しながら考察してみることにした。

なお、アメリカが日本に比べ地方分権が進んでいるのは周知の通りで、教育に関しても州によりある程度の違いがあるだろうと思われる。よって、今回の報告はノースカロライナの一地域での研修に因るものにすぎず、報告文中の「アメリカ」の表記が、アメリカ全体を示すとはいえないことを申し添えておく。私の訪れたタスコラ・ハイスクールは州西部の山間部にあり、いわゆる田舎町といった環境である。その町に住む先生と話をしていたところ、家に鍵をかけないと言っていたくらいであるから相当に平和でのどかな町であるといえよう。

(2)　研究の概要

学校組織内における日米の相違は多々あるが、その中で、日本にはないシステムの一つである、ガイダンスルームが果たす役割を中心に研究を行った。

①　ガイダンスルームの役割

タスコラ・ハイスクールのガイダンスルームでは授業の履修についての相談の他、生徒が抱える個人的な悩みの相談にも当たっている。全校生徒1247人に対してスタッフは女性4人、もちろん教員ではなく専門のスタッフである。

どんな悩みが多いかを尋ねたところ、友人関係のトラブル、上級生との人間関係、勉強のストレスなど、さまざまな答えが返ってきた。友人関係の悩みは女子生徒に多いとのこと。国が違っても子どもは同じだなあと実感する。一方、やはりアメリカと感じたことは、年に数名は妊娠し出産する生徒がいるという事実。このような問題についても、ガイダンススタッフが相談に当たり解決していく。

家庭環境に伴う問題も多い。両親の離婚も多く、家族のもとからではなく施設などから通う生徒もいる。家庭内の問題が生徒に与える影響が大きいのは日米変わらない。問題が家庭内に及ぶ場合は、さらにソーシャルワーカーに引き継がれる。あらゆる面において専門のスタッフがおかれ分業がなされているのは、アメリカの学校システムの大きな特長であるといえよう。

スタッフルームに掲げられたスケジュール表には、びっしりと予定が書き込まれていた。継続して相談が必要な生徒は、だいたい週1回のペースで予約を入れ相談に訪れる。もちろん予約なしで訪れる生徒もいれば、毎日のように訪れる生徒もいる。日本の保健室に近い状態だろう。

その他、教師が生徒の変化に気づき、ガイダンスルームへ行くようにパス（授業を抜けてもよいという証明のようなものだと思われる）をわたす場合もある。例えば、授業中に生徒が泣いていたり、体に痣があるのを見つけたりした場合など、教師はその生徒にパスを渡す。受け取った生徒は特に躊躇なくガイダンスルームへ来るようだ。生徒の変化に最も気づきやすいのは、生徒の一番身近にいる教師だと、カウンセリングスタッフの方は言っていた。

授業履修に関しては、入学以前からハイスクールでのコースや授業についての説明がなされており、生徒が予め自己の進路についてよく考えておくように指導が徹底されている。私が日本の高校生は目的意識が希薄で職業観なども非常に乏しいと言ったら、スタッフの方はアメリカの生徒も同じだと答えた。多くの生徒は簡単に仕事に就け、しかも高給が与えられると思っており、仕事に対する正しい認識を身につけさせるのは大変困難なことだとも言っていた。しかし、それを理解させるため、例えば、この仕事をするためにはこれだけのスキルが必要で、さらにそれでどれくらいの給与がもらえるかなど、マニュアルとして非常に分か

りやすく記された冊子などが作られていた。

② 生徒の意見

実際に数名の生徒にガイダンスルームの活用の仕方などについて質問をした。面接形式で直接時間をとって話を聞いたのは8名のみで、あとは授業後などの会話の中から得た答えである。質問した学年にも偏りがあり、統計として十分であるとはいえないが、それでも一般的な回答は得られたと思う。

ア）利用頻度について

平均して年に3～4回。一般的な生徒は、そう度々利用するものではないようだ。

イ）利用目的について

履修に関する相談が多い。自分の履修したい科目が上手く履修できないとき、予め決めていたコースを変更したい場合などに相談に訪れる。

もちろん個人的な相談に訪れる場合もある。女子生徒の数名が友人関係のトラブルで相談に来たという。ガールフレンドのことで相談に来たという男子生徒もいた。

ウ）問題は解決するか

履修に関する問題は、カリキュラム上不可能でない限り生徒の希望にそうかたちで解決が図られる。

個人的な悩みに関しては、やはり全てが解決するわけではない。しかし、解決せずとも話を聞いてもらうという行為自体により、ずいぶん気持ちが楽になるという意見が多くみられた。

エ）先生など他の人には相談しないのか

履修に関する問題のほとんどは、それを管理するカウンセリングスタッフでなければ処理できない。しかし、どの科目を履修するのがベストかというような問題については、教師に相談する場合もあるという。教師に相談すると答えた生徒はわずかではあったが、教師の方が身近な存在なので気軽に質問できるとのこと。生徒にとってカウンセリングルームは、問題が生じたときにわざわざ足を運ぶ場所なのだろう。

一方で、個人的な悩みについては決して教師には相談しない。これについては日本の生徒に尋ねても同じようなものだろう。しかし、日本の生徒が相談相手の第一に挙げると思われる友人にも、ここではあまり相談しないという答えが多く返ってきた。特に友人関係の悩みの場合、友人には相談しにくい。もっともな意見である。履修に関する問題などとは異なり、個人的な悩みの場合は身近な人でない方がよい。第三者的な立場の人だからこそ相談しやすいということであった。

オ）コース選択や科目履修について

各人が個に応じたコースを選択し、自ら選んだ科目を履修するというのは、一般的な日本の学校とは大きく異なる点である。それらの選択を生徒が悩まず、簡単にできるものなのかどうか疑問であったが、質問した全員の生徒が難しくはないと答えた。そして、これもほぼ全員が自分の進路に沿ったコースを選び満足していると答えた。

カ）卒業後の進路・将来の夢について

質問した生徒が11学年や12学年といった高学年に偏ってしまったせいもあるだろうが、すべての生徒がなんらかの将来的な目標を持っていた。それに準じてコース選択をしているのだから、目標がある程度定まっていることは当然といえば当然なのであるが、日本の生徒ではこうはいかないだろう。

キ）好きな先生・嫌いな先生について

どんなタイプの先生が好きか、または嫌いかという質問をしてみた。ほとんどの先生はいい先生だと答える生徒もいれば、嫌いな先生がたくさんいると答える生徒もいた。タイプについてだが、多くの生徒が好き嫌いの判断基準に、授業のわかりやすさを挙げた。もちろん、「面白いから好き」とか、「口うるさいから嫌い」というような性格面の意見も出たが、生徒たちが最も重視しているのは、教師の学習指導の力量であるようだ。

ク）学校は好きですか

「好き」という答えが多かった。好きな理由として、「友達がたくさんいる」「クラブ活動が楽しい」などの他、「世界史の授業が好き」「被服の授業が面白い」など授業について話す生徒がたくさんいたのには驚かされた。学校が学習の場であるいうことを、生徒が当然のこととして認識している証ではないだろうか。また、「自分で選んだ授業が受けられる」「授業によってメンバーが替わるのが楽しい」など、日本とのシステムの違いを感じさせる回答も多かった。嫌いなところとしては、「校則が細かい」「昼食時間が短い」「朝が早い」など日本でもありがちな意見が多数。その他、「宿題が多い」という回答も目立った。宿題は週末以外は毎日あるそうだ。日本の高校ではそんなに宿題はないと言ったら羨ましがっていた。

③　日米の両高校生活を経験している生徒の意見

日本の高校に１年ほど通った後、タスコラ・ハイスクールへ転校してきたという女子生徒から話を聞くことができた。彼女は母親が日本人、父親がアメリカ人のハーフで、英語は堪能である。日本では横須賀に住んでおり、よって、当初はアメリカでの生活がというよりは、何もないこの地方での生活が退屈だったらしい。現在、運転免許を取得中（16歳から取得可能）で、早く免許が欲しいと言っていた。免許を持たない生徒はスクールバスか親の送迎での登下校となる。アメリカの生徒にとって運転免許の取得は、親からの独立の第一歩であるようだ。

学校生活についてだが、年度の区分に日米で差があるため、留年になるのではと危惧していたらしいが、そのあたりは柔軟に対処してくれたようだ。授業の履修についても特に困難なことはなかったという。必修科目の１つに第２外国語があるが、おそらく彼女は日本語ができるという理由で、履修しなくてもよいと言われたらしい。いろいろな面での配慮が感じられる。授業によってメンバーが替わることに対しては、初めは友達ができにくく、教室の移動なども面倒で嫌だったが、最近は慣れてきたという。友達がたくさんできるともとらえられるし、一長一短のようだ。単位取得に関してはアメリカの方が楽に感じると答えた。確かに宿題は多いようだが、例えばその宿題をきちんとこなすことが確実に評価に結びつく。評価の大部分が試験の点数である日本よりは、アメリカの方がプレッシャーが少ないと言っていた。

ガイダンスルームへは転校してきて間もないころ、先生からパスをもらって来たことがあるという。すぐには友達もできず、慣れない生活に悩んでいたようだが、カウンセリングで解決したというわけでもないようだ。自然に友達ができて解決したのだろう。質問や相談事は日本ではふつう担任教師にしていたが、ここでは先生とはあまり話す機会がなく、日本ほど先生が身近な存在ではないので、相談などはしにくいという。生徒と教師の関係という面における、日米の大きな差であると感じた。

(3)　考察

ガイダンスルームが果たす役割のうちのほとんどは、日本では担任教師が中心に請け負う仕事である。アメリカのハイスクールでは、ホームルームというまとまりは無いに等しく、よってホームルーム担任という存在も特別に意識されるものではない。上述の生徒の意見を見てもわかるとおり、アメリカの生徒は、教師を主に学習指導者であるととらえており、よって、学習以外の問題で教師に相談をしたり頼ったりすることは少ない。だからといって教師と生徒の関係が疎遠なわけではなく、むしろフレンドリーな雰囲気を感じることの方が多かったのも事実である。

一方、日本では生活面などあらゆる面で教師がその世話をするといっても過言ではない。学校外で起こった問題ですら必ず学校に連絡があり、教師はその指導に当たる。特に担任教師は学校では親代わりのような存在である。もちろん私は日本の学校のこのような現状を全面的に否定するのではない。ホームルームというまとまりは生徒の協調性を高め、集団の中での自己の生かし方を学ばせる。教師はあらゆる面から生徒をとらえ深く関わるからこそ、生徒との間に信頼関係を育む。

しかし、今回の研修で私が実感したのは、生徒の教師に対する依存度の違いである。アメリカの生徒は、日本の生徒ほど教師に依存していない。そしてそこから、私自身の個人的な課題として痛切に考えさせられたことがある。それは、自分が普段、生徒の世話をやきすぎているのではないか、特に担任するクラスの生徒に対しては、自分のクラスから問題を生じさせてはいけないというような意識から、生徒自身が自主的に解決に努めるべき問題に対してまで、過剰な手助けをしていたのではないか、という疑問である。アメリカの生徒に比べ日本の生徒は、何かにつけて受け身で指示待ちの傾向がある。そのような傾向を憂い、自主自立の精神を養うことが大切であると知りながら、実際は自分自身がそれに逆行するような指導をしていたのかもしれない。

アメリカの学校生活は、一見すると日本の学校より自由で楽しそうにみえる。しかし、学校が実社会と比べ温室のような状態であるともいえる日本の学校とは異なり、アメリカの学校のシステムには非常にシビアな面もある。例えば、校則に違反した場合などは、はっきり「Penalty（罰則）」という形でその責任を負わされる。欠席超過分の補講を受ける際は補講代金を支払わねばならない。このようなシステムの中でアメリカ

の生徒たちは、自由に伴う責任もきちんと自覚しながら学校生活を送っているのではないだろうか。

また、学習に対する意欲の面でも差を感じる部分があった。もちろんアメリカの生徒は皆勉強が好きで、などというようなことではない。私が感心したのは、アメリカの生徒は学校生活の基本は授業であると心得ており、さらに、自ら選択した授業を受けていることに満足しているという事実である。自分で選ぶという行為には否応なく自主性が伴い、自分で選んだ授業だからこそ、きちんと学習していかねばならないという意識も強まるのではないだろうか。さらに、それは進路に直結する問題でもあり、早期から社会を見据え、自己の進むべき道を考え決定していく足がかりとなる。実際に実習科目などでは、職業訓練的な授業内容が幅広く展開されている。

このようにアメリカでは、生徒の自主性を尊重しつつ、それに伴う自己責任もはっきりと意識づけさせる教育がなされている。学校は社会人としての資質や実際に必要なスキルを身につけるところであり、社会に出るまでの猶予期間ではない。アメリカの子どもは日本の子どもに比べて自立している。自立心の育成という面において、日本はアメリカの教育に見習うべき点が多分にあるのではないだろうか。

(4) 今後の展望

教師の役割ひとつを取ってみても、日米には大きな差があり、それぞれメリット、デメリットの両面がある。よって、どんな事柄にしてもアメリカのシステムをそっくりそのまま日本に当てはめることは不可能であるが、今回の研修を通じて私が、具体的にアメリカの学校を参考にしていきたいと感じたのは、現在、徐々にではあるが日本でも取り組みが進められている次の2点である。

① スクールカウンセラーや教育相談室の充実

近年ますます心の悩みを抱える生徒の数は増しており、その原因や内容も多種多様になってきている。教師自身がカウンセリングマインドの涵養に努めることはもちろんであるが、内容によっては教師という立場であるが故に相談しにくい事柄も多いにちがいない。アメリカの生徒との話の中でも、「第三者的な立場の人だから話しやすい」、「話を聞いてもらうだけでも楽になる」という意見が多数みられた。日本でも各学校に専門のスタッフが常駐する制度が整うことを期待する。

私の前任校で週1度スクールカウンセラーの先生が来校されていた年があった。その年、私が担任したクラスの生徒も数名、カウンセラーの先生のお世話になった。ただ、生徒をカウンセラーの先生に会ってみようという気にさせるまでが一苦労であり、さらに週1度の勤務では、その機会をうまく設定するのも非常に困難であった。

日本人はどちらかというと自分の心の内を外に表すことを嫌う場合が多い。悩みや不安を独りで抱え込む生徒もきっと多いだろう。だからこそ、日本でもカウンセリングルームのような場所が当たり前に存在し、生徒たちが自然に相談を受けに行くことができる環境を作っていくことが強く望まれる。

② 選択教科幅の一層の拡大

選択幅が広ければ広いほど、生徒は多少なりとも自らの興味関心に沿った学習ができることになる。興味関心が高ければ高いほど、学習意欲もそれに伴うことは言うまでもない。また、どの科目を選択するかによって、自己の進路が決まってくるとなれば、いやが上にもその時点で進路について考えなくてはならなくなる。確かに高校生の段階で自分の進路を明確にするのは困難なことかもしれないが、土壇場になって初めて考えるのでは遅すぎる。自分の生き方に対する展望や目的を早いうちから身につけさせることが重要だが、その第一歩として授業を選択するということは効果のあることだと思う。

これも前任校の話だが、学校が単位制に変わり、生徒の選択教科の幅がそれまでに比べ相当な割合で拡大した。入学したばかりの生徒に卒業後の進路を考えさせ、保護者の理解も得つつ、授業を選択させていくのは並の苦労ではなかった。しかし、初めは面倒がっていた生徒も、自分で選択できるということ自体には満足しているようすだった。その後転勤になったので、その生徒たちが現在アメリカの生徒のように、自分の選んだ授業を受けていることにも満足しているかどうかは分からない。だが、何においても選択幅が広いということは、必ず生徒の自主性や主体性を伸長させるにちがいない。

(5) おわりに

アメリカ教育の日本とは異なる部分に特に焦点を当

てて研究を行ってきたが、当然日米変わらないと感じるところも数多くあった。例えば、今回私が見た範囲内では、English などの基本的な科目の授業のようすは、日本と大差ないものであった。ノースカロライナでは、年度毎に州の統一テストが実施され、その結果は学校の評価だけでなく、教師自身の給与にも反映する。これは生徒の基礎学力の定着を図るためのものだが、同時にそれが知識詰め込みの傾向を強めるおそれがあることも否めない。授業参観した間にも小テストを実施している光景を何度となく見かけた。生徒主体の楽しい授業と学力の伸長と、本来相反するものではないはずだが、現実的にその両方を達成していくのは非常に難しい。今、日米の教師は逆からの流れにより、同じところで試行錯誤しているのではなかろうか。

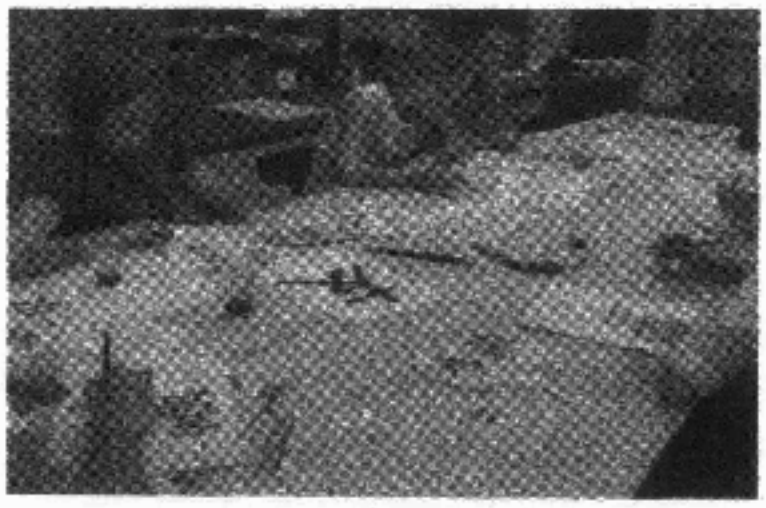
子ども自体もまた、本質的な違いは決してない。アメリカの高校生は体格も立派で私服姿であることもあり外見は非常に大人びて見えるが、実際に接してみると日本の高校生と何ら変わりはなかった。アメリカの子どもも案外シャイで無邪気だというのが、この度の研修での私の印象である。

◎ 授業実践

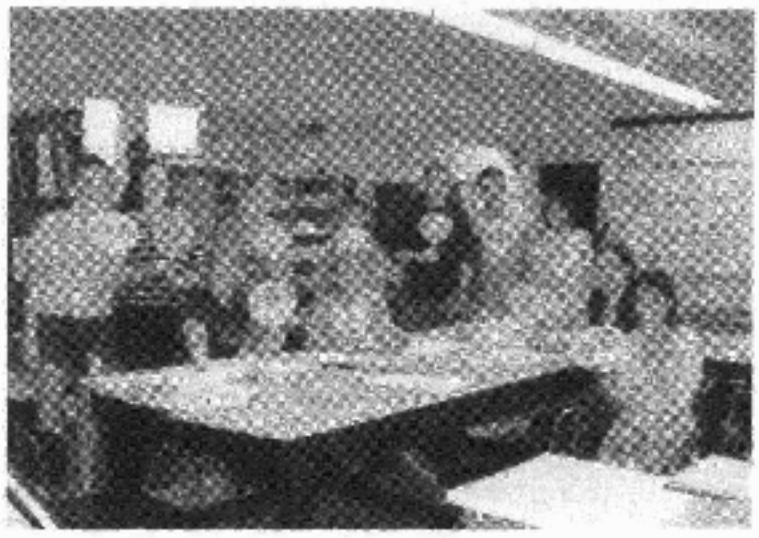
最後に、個人研究テーマとは別にタスコラ・ハイスクールで行った授業実践について簡単に報告しておく。「漢字や書道に親しむ」内容の授業を2クラスで2時間ずつ、さらに、ビデオを用いた「日本の学校生活の紹介」を7クラスで1時間ずつ行った。教師はやはり授業を通してこそ、真に子どもと触れあうことができると実感した。アメリカで生徒と教師という関係性を持って生徒の姿をとらえることができたのは、誠に貴重な経験であった。授業内容については、以下の指導案を参照いただきたい。

授業後の生徒の感想には次のようなものがあった。「以前より日本への興味が増した」「新しいことを学ぶのは楽しい」「違う言葉を習うのが楽しい」「漢字がどこで生まれどうやって日本に伝わったのかも知りたい」「日本についてもっと他のことも知りたい」「書道のルーツを知りたい」などなど。

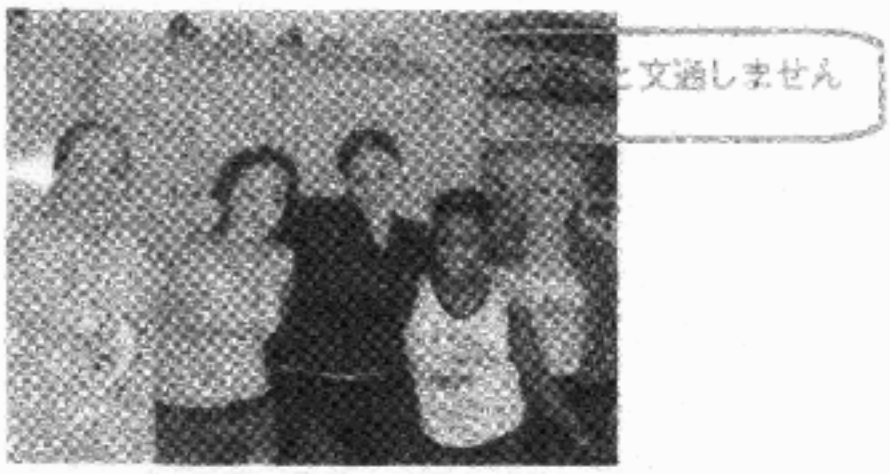
生徒たちが示した未知のものに対する興味や好奇心が私の胸にも嬉しく響いた。そして、興味を持ったことに対しての、さらなる探求心もうかがえる。知りたいという欲求は本来すべての子どもが持っている、そんな当然のことを改めて実感させられた授業であった。



授業風景



授業を終えて



私たちと文通しませんか

私が描きました。日本のアニメのファンなんです。

学　習　指　導　案

鳴門市立鳴門工業高校　　川　村　美千代

主　題　　日本文化に親しむ

目　的　　漢字についての知識を深めることにより、アルファベットとは違う漢字の成り立ちや表意性などを理解し、言語に対する興味関心を深める。
書道を通して日本人の心や日本文化についての興味関心を深める。

	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	◎教師の自己紹介。 ・漢字で書かれた名前を見て、漢字のもつ意味、由来などについての説明を聞く。	・「名は体を表す」のことわざを説明し、名前に込められた思いなどについても理解させる。
展開1	◎さまざまな日本人の名前から、漢字の表意性について理解する。 ・昭和初期の名前と現代の名前を比較する。 （男）　勝・勇・進　　⟷　大輝 （女）　美智子・和子　⟷　さくら ・生徒自身の名前を漢字で表してみる。	・漢字発祥の国、現在使われている国などについても考えさせる。 ・名前からうかがえる歴史的背景や、日本人の意識、感覚などについても着目させる。 ・皇室の名前なども紹介する。
展開2	◎書道に親しむ。 ・現代でも日常で使われている書道として、日本の熨斗袋や卒業証書を知る。 ・生徒作品を鑑賞し、日本の書道の授業や書き初めなどについて理解する。 ・書く言葉を選び、実際に書道をする。	・書道が日本の文化であり、芸術であることを理解させるとともに、現代社会における書道の位置についても理解させる。 ・日本人の好きな言葉を紹介したり、生徒自身の好きな言葉や名前を聞き、それを漢字に改めたりする。 ・清書はうちわに書いて仕上げとする。
まとめ	◎感想を発表する。 ・授業全般、作品の出来映え、なぜその言葉を選んだかなどについて発表する。	・アメリカの生徒が選んだ言葉と日本人のそれを比較し、国民性などについて考察する。 ・生徒からの質問があれば聞く。

※　実際の授業では上記指導案に基づく授業を、全２時間（50分授業を２回）で行った。